



日本文学全集

1

古事記・万葉集



古事記・万葉集

古今和歌集・新古今和歌集

河出書房



古事記・万葉集



カラー版日本文学全集 1

1968©

昭和四十三年三月二十日 初版印刷
昭和四十三年三月二十五日 初版発行

定価 七五〇円

訳者代表 山本健吉

発行者 河出朋久

印刷者 草刈親雄

装幀者 亀倉雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話 東京(292)三七二一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

古事記・万葉集

古事記(全)……………福永武彦訳 五

万葉集……………山本健吉訳 三

古今和歌集……………山本健吉訳 三

新古今和歌集……………池田弥三郎訳 三

注釈……………池田弥三郎 三〇

年表・索引……………岡野弘彦 三三

解説……………山本健吉 三一

色刷口絵……………安田鞆彦

色刷挿画……………安田鞆彦

古事記……………真野満

万葉集……………守屋多々志

古今和歌集……………佐多芳郎

新古今和歌集

古事記・万葉集

古
事
記
(全)

福
永
武
彦
訳

訳者からの注意

1 これは「古事記」の全文を現代口語に翻訳したものである。テキストとしては、本居宣長撰「古事記伝」(日本名著刊行会版)所載本文、及び田中頼庸校訂「校訂古事記」初版を適宜比較し、岩波文庫の幸田成友校訂本、角川文庫の武田祐吉訳註本をも参照したが、その後、岩波古典文学大系「古事記」「古代歌謡集」が出版されたので、それに従って訂正を試みた。歌謡原文はおおむね右の「古代歌謡集」に従っているが、多少訳者自身の意見にもとづいた箇所もある。なお、歌謡については、筑摩版日本古典文学全集において新訳を試みたので、それにより旧訳を訂正した。

2 訳文は新かなづかいを用いる。ただし歌謡、及びこれに準じる詠辭の部分は、原文を歴史的かなづかいのままあげてある。これらは、本文中において二字下りである。なお、歌謡には通し番号を附す。

3 右の訳文は、同じく二字下りで、新かなづかいによる。

4 人名は、初出の場合には漢字書きの下にカッコして、片かな・歴史的かなづかいを用いた。再出の場合は片かな書きしてある。これは読みやすいことを旨としたためである。ただし、姓の場合、漢字に片かな・新かなづかいのルビを附した。地名や普通名詞の場合も同様。

5 各章の分けかた、及びその標題は、訳者の考えによる。段落の切りかたも同様。

6 原文において注記された箇所は、一字下りにしてある。私注は目立たぬよう簡単に本文に混じえた。特に必要ある場合は「」中に収めた。

7 訳文は原典のリズムを伝えることに重点を置き、地の文において、敬語的語法を無視した。その他解釈に関しても、責任はすべて訳者にある。

目次

古事記 序	二
古事記 上卷	
一 宇宙の初め	一四
二 神世七代	一四
三 伊邪那岐命と伊邪那美命	一五
四 黄泉国	一九
五 禊ぎはらい	二一
六 うけいの勝負	二三
七 天石屋戸	二五
八 須佐之男命の追放・穀種	二七
九 八俣の大蛇	二七
一〇 八雲たつ	二九
一一 大國主神と兎	三〇
一二 大國主神の受難	三一
一三 根国での冒険	三三
一四 沼河姫の歌	三四
一五 須勢理姫の歌	三五
一六 海から来る神	三八
一七 高天原の使たち	三九
一八 大國主神の国譲り	四二
一九 朝日のただ射す国	四四

三	木花之佐久夜姫	四
二	海幸山幸・綿津見の宮	四
三	豊玉姫の歌	五
古事記 中巻		
三	〔神武〕 東への道	五
四	〔同〕 征旅の歌	五
五	〔同〕 七乙女	六
六	〔同〕 狭井河の歌	六
七	〔綏靖〕 系図	六
八	〔安寧〕 系図	六
九	〔懿徳〕 系図	六
一〇	〔孝昭〕 系図	六

三	〔孝安〕 系図	六
三	〔孝靈〕 系図	六
三	〔孝元〕 系図	六
四	〔開化〕 系図	六
五	〔崇神〕 系図	六
六	〔同〕 三輪山の神	六
七	〔同〕 四道將軍	六
八	〔垂仁〕 系図	六
九	〔同〕 佐保姫の死	六
一〇	〔同〕 物言わぬ御子	七
一一	〔同〕 丹波の姉妹	七
一二	〔同〕 時じくの木の実	七
一三	〔景行〕 系図	七

四四	〔同〕	倭建、熊曾を伐つ……………	七五
四三	〔同〕	倭建、出雲を伐つ……………	七四
四二	〔同〕	倭建、東国を伐つ……………	七三
四一	〔同〕	望郷歌……………	七〇
四〇	〔同〕	白鳥……………	六三
三九	〔成務〕	系図……………	八四
三八	〔仲哀〕	系図……………	八四
三一	〔同〕	太后、新羅を伐つ……………	八四
三〇	〔同〕	喪の船……………	八六
二九	〔同〕	氣比の大神……………	八七
二八	〔同〕	酒楽の歌……………	八七
二七	〔応神〕	系図……………	八八
二六	〔同〕	葛野の歌・蟹の歌……………	九〇

二五	〔同〕	髪長姫……………	九二
二四	〔同〕	劍の歌・酒の歌……………	九三
二三	〔同〕	大山守命の乱……………	九三
二二	〔同〕	天の日矛……………	九三
二一	〔同〕	春の神と秋の神……………	九六

古事記 下卷

二〇	〔仁徳〕	系図……………	九八
一九	〔同〕	嫉み深い太后と黒姫……………	一〇〇
一八	〔同〕	嫉み深い太后と八田若郎女……………	一〇一
一七	〔同〕	女鳥王……………	一〇四
一六	〔同〕	雁の卵……………	一〇六
一五	〔同〕	枯野の歌……………	一〇六

六	〔履中〕	墨江中王の乱	二七
六	〔反正〕	系図	二〇元
七〇	〔允恭〕	系図	二〇元
七一	〔同〕	輕の兄妹	二一〇
七二	〔安康〕	目弱王の復讐	二四
七三	〔同〕	馬飼牛飼	二六
七四	〔雄略〕	白い犬	二七
七五	〔同〕	赤猪子の歌	二八
七六	〔同〕	吉野の少女・蜻蛉の歌	二九
七七	〔同〕	葛城山	三〇
七八	〔同〕	袁杼姫の歌・天語歌	三三
七九	〔清寧〕	二人の少年の舞	三三

八〇	〔同〕	歌垣	二四
八一	〔顯宗〕	父君の仇	二五
八二	〔仁賢〕	系図	二七
八三	〔武烈〕	系図	二七
八四	〔繼体〕	系図	二八
八五	〔安閑〕	系図	二八
八六	〔宣化〕	系図	二八
八七	〔欽明〕	系図	二九
八八	〔敏達〕	系図	二九
八九	〔用明〕	系図	三〇
九〇	〔崇峻〕	系図	三〇
九一	〔推古〕	系図	三〇

古事記序

天皇の忠実な臣下である安万侶（ヤスマロ）が、ここに奏上いたしました。

そもそも遠い昔のこと、造化の気が次第に凝りかたまっても、いまだに外に現われて来るにはいたらず、従つて名前もなければ、動きもない、誰もその形を知らないというそもそもの宇宙の初めに、天と地とが分れ、アメノミナカメシノ神・タカミムスビノ神・カミムスビノ神の三柱の神が、宇宙造化の緒をつくり、陰と陽とが別になつて、ここにイザナギノ神・イザナミノ神が、生きとし生けるものの親となりました。そこでイザナギノ神は、この世から黄泉の国を訪れてお戻りになつた時に、目を洗つて日の神・月の神をお生みになり、海水に浮き沈みして身を潔めた時に、多くの神々が現われました。従つて、宇宙の初めは奥深く暗く、国家の初めは遠くかすかではあります。が、古くから伝えられました尊い教えによりまして、神々が国を生み、島を生み、また神を生み人を生んだことが、分るのであります。

そこで神々が、天の岩屋戸の前で、神の枝に鏡を掛け、うけいの勝負にあつて、ササノヲノ命が玉を噛んで吐いたところから、歴代の天皇が続ぎ、アマテラス大神が剣を噛み、ササノヲノ命が八俣の大蛇を斬つたところから、多くの神々が相継いで起つたことが分ります。神

神が、安河原で会議を開き、そのために天下は平らになり、タケミカヅチノヲノ神は、出雲の伊那佐の浜で、オホクニヌシノ神に国土を譲るよう談判して、そこで国の中が穏かになりました。その結果、ニギノ命が初めて天から高千穂の嶺にお降りになり、カムヤマトノ天皇〔神武〕が、秋津島をはるばる東へと征め上られました。この道すがら、荒々しくさまじい神が熊に化けて現われ、タカクラジを通して天から剣が下され、尻尾のある人間が道を遮り、大きな鳥が天皇を吉野へ御案内しました。軍隊の者が舞い踊り、合図の歌によつて賊どもを討ち取ることもありました。ミマキイリヒコノ天皇〔崇神〕は、夢の中のお告げを聞いてオホモノヌシノ神を祭られ、そのために賢明な天皇とお呼ばれになり、オホサザギノ命〔仁徳〕は、民家の煙の立ちのぼるのを眺めて、人民をおいつくしみになりましたから、今に聖の天皇と伝えられております。さかのぼつて、ワカタラシヒコノ天皇〔成務〕は、近淡海に高穴穗の宮をつくり、国や果の境界を定められ、ヲアサヅマノワクゴノスクネノ命〔允恭天皇〕は、遠飛鳥に飛鳥の宮を建て、天下の氏や姓をお正しになりました。このように、政治のやりかたに緩なると急なるとがあり、文明を悦ぶと実を尊ぶとの違いはありますが、いかなる時代におきましても、すべて天皇の御事業は、過去のことがらを参照して、今の時代を明かにし、教化道徳の衰えたのを正しく起し、五倫の道の絶えたのを復興するという、これ以外にはなかつたのであります。

飛鳥の清原に大宮をつくられて、天下をお治めになりました天皇〔天武〕の御世に至りますと、日嗣の御子として、早くも天に昇るべき竜のごとき帝王の徳をお示しになり、のちには雷が時を得て鳴るがごとき御活躍をなさいました。先の天皇〔天智〕の崩御ののちに、世に歌われた童謡をお聞きになり、また暗夜、伊賀の名張の横河に黒雲の起る

のを占^うわれて、帝位を受け継がれることをお知りになりました。しかし時いまだ熟さない初めの時には、蟬のぬけがらのように吉野の山に姿を変えられ、時を得て衆望を集められるや、伊勢の国に虎のごとく堂々たる進軍をなさいました。そしてその軍隊はたちまちのうちに山や川を押し進み、雷のように鳴り響き、稲妻のように突進し、矛を突いて武威を示せば、猛士は煙のように起り、赤旗をひるがえせば、敵兵は屋根の瓦のようにばらばらに頽れ散りました。日数が十二支をめぐらないうちに、敵軍潰え、悪臭も自然と消えて澄みわたりました。そこで軍に使った牛馬を休ませ、旗を巻き武器を納め、天下泰平の歌をうたい、舞い踊って都に凱旋あそばされました。時あたかも木星が西の方角にある西の年の二月、清原の大宮において、天下を治める御位にお即きになりましたが、その徳は、支那五帝の一人黄帝にまさり、三王の一人周の文王にまさっておりました。三種の神器を手にして天下を治め、天津日繼を継いで、その御稜威は国の隅々に至りました。陰と陽との二つの気を正しくし、木火土金水の五行の順序をととのえ、神の道を説いて世情を導き、聖の教を明かにして国の中に及ぼされました。しかもそればかりでなく、海のように深い御智慧は、遠い古代のことを探り求められ、鏡のように輝かしい御心は、先代のことを明かに御覧になりました。

ここにおいて、天皇の仰せられますには、「私の聞き及んでいるところでは、諸家が先祖から伝え持っている帝紀と本辞とは、今ではもはや真実と違って、虚偽を加えているものも多いという。今においてその誤りを正さなかったならば、幾年も経たないうちに、言い伝えの本旨が減びてしまうだろう。それは帝紀と本辞とが、国家の行政の根本であり、天子の事業の基礎であるからだ。そこで帝紀と旧辞とが、真実のままであるかどうかを調べ、偽りの部分を取り除いた上、これを

記述して後世に伝えようと思う。」このように仰せになりました。この時たまたま、姓は稗田、名は阿礼（アレ）という舎人がありました。年は二十八、生れつきはなほだ聡明であり、どのような文章でも一度目で見れば暗誦することが出来、一度耳で聞いたことは、心に刻んで忘れません。そこで天皇はアレに御命令になり、帝皇の日繼及び先代の旧辞を、読み習わしめたまいました。しかしながら天皇の御世が變つて、この御事業はいまだ実現するに至らなかったのであります。

謹んで考えまするに、ただいまの天皇（元明）は、天地人の三つの徳に通じて、その光は宇宙の隅々にまで行き渡り、御殿にいられましても、その徳は、馬の蹄の走りどきとどまるところ、船の舳の漕ぎどきとどまるところにまで及んでおります。太陽は天にあって光り輝き、めでたい雲は空にたなびき、幹を異にして枝の連りあう連理の枝とか、一本の茎から二本の穂が出る嘉禾とかいう瑞祥は、次々と現われて、これを記す書記官の、手を休めるひまでもございません。事を都に伝えるとて次々と烽火をあげる遠い異国、通訳がその言葉を訳しあらためることが数回に及ぶ遙かな異邦から、海を渡って朝廷へもたらされる貢物はうす高く集まり、倉の中がからになる月とては、一ト月もありません。その誉れは、夏の禹王よりも高く、その徳は殷の湯王に冠すると申せますでしよう。

ここに天皇は、先代の旧辞及び帝皇の日繼の、誤り違うところを正そうとの思召しから、和銅四年九月十八日、天皇の忠実な臣下であるヤスマロに命じて、稗田のアレが誦むところの、先の天皇の御命令になりました旧辞の類を、撰録して差し出すようにと仰せられました。そこで謹んで仰せに従い、詳細に考証し、いちいち撰択して記述いたしました。しかしながら、遠い古代のことでありますから、言葉も内

容も質朴であり、文を作り、句に書きしるそうとしても、文字に現わすことは困難であります。全部訓ばかりで、漢字の意義に従って書けば、その内容が古意をそのまま示すわけにはいかず、また、全部を音ばかりで書けば、はなはだ長くなってしまいます。そこで、あるいは一句の中に、音と訓とを混せて使い、あるいは一つの事を記すのに、全く訓ばかりを使いました。書いたままではどうにも分りにくいものは、下に注を加えましたし、意味のとりやすいものは、格別注を入れるようなことはいたしません。また、「日下」の姓を「玖沙訶」と言い、「帶」という名を「多羅斯」と書くなど、こういう類は、もとのままで改めることをいたしません。書きしるしましたとおおよそのところは、宇宙の初めから、小治田の宮おはりだにおいてになった天皇〔推古〕の御世まで。これを、アメノミナカヌシノ神から、ヒコナギサタケウガヤフキアヘズノ命までを上巻、カムヤマトイハレヒコノ天皇〔神武〕から、ホムダワケノ命〔応神〕までを中巻、オホサザキノ天皇〔仁徳〕から、小治田の宮〔推古〕までを下巻と定め、合せて三巻に書きしるして、謹んで献上いたします。天皇の忠実な臣下であるヤスマロが、右の通り申し上げます。

和銅五年正月二十八日

正五位上勲五等 太朝臣安万侶

古事記上巻

一 宇宙の初め

宇宙の初め、天も地もいまだ渾沌^{こんとん}としていた時に、高天原^{たかまのはら}と呼ばれる天のいと高いところに、三柱の神が次々と現われた。初めに、天の中央にあって宇宙を統一する天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）。次に、宇宙の生成をつかさどる高御産巢日神（タカミムスビノカミ）。及び、同じく神産巢日神（カミムスビノカミ）。これらの神々は、みな配偶を持たぬ単独の神で、姿を見せることがなかった。

その後に、天と地とのけじめのつかぬ、形らしい形もないこの地上は、水に脂^{あぶら}を浮べたように漂うばかりで、あたかも海月が水中を流れ流れて行くように頼りのないものであったが、そこに水辺の葦^{あし}が春さきにいつせいに芽ぶいて来るように、萌え上って行くものがあった。

この葦の芽のように天に萌え上ったものから、二柱の神が生れた。初めは、宇麻志阿斯訶備比古遲神（ウマシアシカビヒコヂノカミ）、うるわしい葦の芽の天を指し登る勢いを示す男性神。次は天之常立神（アメノトコタチノカミ）で、永遠無窮の天そのものを神格化した神である。この二柱の神も配偶のない単独の神で、姿を見せることがな

かった。

以上にあげられた五柱の神は、地上に成った神とは別であって、これらは天神である。

二 神世七代

以上の、天に現われた神々に対して、地においても次々と神々が現われた。脂^{あぶら}のように漂っていたもののうちから、まず、国之常立神（クニノトコタチノカミ）、これは生れるべき地を神格化した神である。次に豊雲野神（トヨクモノノカミ）、脂^{あぶら}のようなものが次第に凝りかたまり、広々とした沼のようになって行くことを示している。この二柱の神も単独の神で、姿を見せることがなかった。

次に現われたのは、男性の宇比地邇神（ウヒヂニノカミ）と女神の須比智邇神（スヒヂニノカミ）、脂^{あぶら}のように漂うもののうちから、潮と土とは次第に分たれて、ようやく砂や泥を混じえた沼となったことを示している。

次に、男神の角杵神（ツノグヒノカミ）と女神の活杵神（イクグヒノカミ）、沼地の泥が次第に固まり、角^{つう}のように春芽が芽ぶいて育って行くことを示している。次に、男神の意富斗能地神（オホトノヂノカミ）と女神の大斗乃弁神（オホトノベノカミ）、すなわち広やかな大地がここに固まったことを示している。次に男神の湍母陀琉神（オモダルノカミ）、大地の表^{おもて}が不足なくととのったことを示し、女神の阿夜訶志古泥神（アヤカシコネノカミ）、この時に「あやにかしこし」とあげた悦びの声を神格化したものである。次に現われたのは、男神の伊邪那岐神（イザナギノカミ）と女神の伊邪那美神（イザナミノカミ）、すなわち後に述べるように、互いに誘^{いそな}いあった神の意味である。